1994(平成6)年1月1日(土)

ふるさと通信

発行所
ふるさと企画
代表 小林政一
〒968-01
福島県大沼郡昭和村
大字野尻字東
☎0241(57)2544

©ふるさと企画 1994

高齢者王国の建設へ

藤森 弘

喰丸文化再学習センター(旧喰丸小学校)の前庭から威勢のよい掛け声が響く。

「三番ゲート通過!」

喰丸地区のゲートボールチームの練習風景は、いつも元気一杯だ。休憩時間には、持ち寄ったお茶菓子をつまみながら世間話に花が咲く。チームの最高年齢者は八十三歳だ、という説明に私は驚いた。

「生涯現役」。喰丸のおじいちゃん、おばあちゃんには、そんな言葉がぴったりだ。都会のお年寄りたちが、コンクリートの牢獄のような施設に押し込められて生気失っているのに比べ、ほんとうにしあわせそうに見える。

子供や孫とともに暮らせたならば、もっと毎日が楽しいに違いないが、今の日本と核家族化が進んでそれは難しい。家族ぐるみで生活する風景は都会でも農村でも極端に少なくなってしまった。父親は残業の連続で会社に縛りつけられ、母親は住宅ローンの返済を助けるために共働き。子供たちは学校と塾の勉強に追われ、家族の団欒を楽しむ余裕がない。お年寄りの生活の場は、社会の片隅へと追いやられる一方だ。

こうした世の中の趨勢と比較すると、昭和村に住むお年寄りたちは実にうらやましい生活を送っている。家族が遠く離れているとしても、"もう一つの家族"ともいえる「講」を軸とした相互扶助組織に守られ、孤独を強いられることが少ない。また、農林業には都会のサラリーマンのような定年がなく、生きがいを持続できる。(ある評論家は「高齢者の働く場を確保することが最大の福祉施策だ」という。)

空気の澄んだ山野を散策し、新鮮な山菜や川魚を食べ、温泉に毎日入ることができる悠々自適の暮らし。この村で生まれ育った人には何の変哲もないことのように思えるかもしれないが、こうした生活のスタイルは都会では絶対に真似のできないぜいたくなのである。自動車の排気ガスと騒音にさらされ、コンクリート砂漠をさまよい、添加物の入った即席食品を食べ、交通事故の危険にいつも脅えなければならない都会のお年寄りたち…。どちらが幸せかは、もう言うまでもないだろう。

日本が未曾有の高齢化社会を迎えるにあたって、「高齢化王国」の建設を考える場合、明らかに農山漁村の方が基礎条件において有利なのである。その中でも昭和村は、自然環境条件や相互扶助精神に優れ、書画をはじめとする生涯学習の営み、手打ちそばやマタタビ細工に代表される手仕事など、高齢者の生きがいや健康を維持するための生活の秘術が沢山存在するのである。「二十一世紀に向けて奥会津が来るべき日本のモデルになり得る」と私が常々主張しているのは、奥会津の町村が高齢者王国となり得る基礎条件を備えていると思えばこそである。

しかし、高齢者福祉の問題は解決すべき点も多く、現在のまま放置しておいてよいというわけではない。独り暮らし世帯の増加は、食事が不規則で栄養摂取がままならない、在宅での身の周りの世話が満足に受けられない、介護者がいないーなど、不安点も数多い。痴呆性老人を抱える家族の介護負担の軽減も重要な行政課題だといえよう。特に冬期間の介護体制の整備は緊急課題で、独り暮らし老人用の冬期集合住宅の建設や屋内ゲートボール場の設置、給食の宅配サービスなどは早急に検討してしかるべきだろう。

(フリーライター)